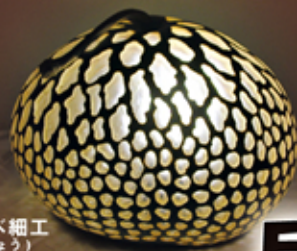


## 秋号



ふくべ細工  
(かんびょう)  
制作：結城市大橋町  
関 隆行

## 民話を楽しまおう

民話  
ゆうき

## たんぼの月

文・結城市教育委員会  
挿絵・佐々木 明



「小塙は結城の  
むかしのこと……」

「じいちゃん  
どんなおはなしが  
あったの？」



むかしのことでした。

結城の町から少しはなれた小塙という村に更助という若い百姓が住んでいました。更助はとてもはたらきもので、一日中はたらきました。そうして夕方になると、畑でとれた野菜を町へ売りに出かけました。

ある日のこと、いつものように更助はさといもをたんと売ったお金をふところに入れ、夜の道を帰ってきました。ゆるやかな丘をおりると一本杉の立つ大日堂がありました。もう小塙の村はすぐそこです。まんまるい月の光でたんぼの稲はこがねのように美しくなびていました。

更助はふとだれかの泣き声をきいたような気がしました。風の音かなと思いましたが、そうではありませんでした。よく見ると、大日堂の小さなほころの近くで、一人の女の人が泣いていました。

2

「どっしたんだ？こんなところでまあ。」更助はおどろいてその人に近づいてみると、このあたりでは見かけたこともない若く美しい女の人が、すすり泣いているのでした。更助がわけをたずねると、「わたくしは鬼怒川の向こうの伊調というところから来たものです。母が病気で死にそうなので、結城の四ツ京に住んでいるという医者をやつてやってきました。しかし持ち合わせのお金がたりなくて、医者は来てくれません。どうかあなたさまのお金をかしてください。」

その人はお金ぶくろを見て熱心にたのみこみました。「そうか。」更助はかわいそうに思いました。もともと欲のないしんせつもののも更助のことですから、そのようなかわいそうな人を見れば、すぐ助けてあげたい気持ちになるのでした。しかし、よくその女の人を見ると、



3

なんと、きものすその方から、たぬきのしっぽがのぞいているではありませんか。

「ははん、これは狸だな。」

と思いつつも、更助はその狸をおこる気持ちにはなれませんでした。

こんなにしんげんにたのんでいるのを見ると、母親の病気はきつとほんとうなのかもしれないと思いました。

「よし、狸にたまされたふりをして、このお金をくれてやろう。」

更助はこう思うと、金ぶくろを思いきってあげてしまいました。

「金はかえさなくてもよいから、かあさまをだいにしめてやってくれや。」

更助は帰るときにこういって、のらじぼんのふところの手をつっこんで歩きだしました。

4

更助が行ってしまおうと、狸はしょんぼりとなってしまいました。

いつもは人をだましてよろこんでいたあのゆかいな気持ちとはちがって、きょうはなにかかなしい気持ちがこみあげてくるのを感じました。

「更助はしょうじきな人だ。」

「更助はあったかい人だ。」

と狸は思いました。

それにくらべてわたしはと狸は考えてしまいました。



5

その夜のことでした。

更助の家の雨戸をだれかがたたいたので、

トントン、ササー、トントン、ザザー、更助はその音で目をさまし、雨戸をあけてみると、のきばのむしろの上に狸にあげたはずのお金が袋のままそっくりのっているではありませんか。

「狸のやつ、金がなくて困るだろうに、持っていけば、おらあよく知ってるんだから。」

と庭に向かって声をかけましたが、

狸の姿はその辺にはありませんでした。ただ月の光だけが更助の家や田んぼの稲をこぼして照らしておりました。

6

次の日も更助は町へ出かけていき、そして月夜の道をもどってきました。すると、ふと東の空からもうひとつの月がのぼってくるではありませんか。

更助は思わず「おう」と空をふりあおぎました。

中空に輝く月は、白々と遠くの森の方まで照らしていましたが、赤い大きな月は、稲田の上すれすれに浮んでおりました。

まるで中空の月と田んぼの月がたがいに呼びかわしているように、二つの月は生きもののように浮いておりました。

しかし、赤い月はいつまでも浮いてはいませんでした。

更助がおどろいてながめている間に、月は大日堂の一本杉の根もとあたりに落ちていきました。

次の日はおでんとつさまがキラキラと照って、よい日よでした。

更助はひとり、のこぎりがまをこしにさして稲かりにでかけました。

★わらしべ協賛店サードス引換券  
有効期限：2010年  
10月わらしべ発行～  
11月31日まで

7

そして大日堂の一本杉のところ、  
更助は朝つゆにぬれてつめたくなった  
若い狸のなきがらを見つけてました。

それから三日もたったころ川向こう  
の伊讃へ行って来た村の人が、大きな  
狸が畑のはずれの木立のところで息た  
えていたという話を聞いてきました。

8

それらしい、大日堂あたりの田んぼ  
道を通りかかった人たちは、よく月が  
二つ浮いているのを見ることができ  
たそうです。

そしていつか村の人たちは、あの月  
は狸の生まれかわりにちがいないと思  
うようになりました。

おしまい。

